

【2】 自然の味、そのままに ゆずの香り

川根ゆず組合が商品開発し

このほど店頭販売を開始した「川根どろどろゆず」
それを記念して実施した販促キャンペーンでは
どのような手応えがあったのか

水口眞夫組合長が語った



町内3カ所で展開された「川根どろどろゆず」キャンペーン。組合員らが、観光客などに対し、同ドリンクを無料で振る舞った。写真は四季の里前。



今回のキャンペーンの概要を教えてください。

●水口 7月3日、緑のたまてばこ（茶茗館内）と特産品販売所四季の里で午前9時から正午まで、白沢温泉もりのいずみで正午から午後2時半まで、販促キャンペーンを実施しました。各所に組合員などを4人ほど配置し、訪れた観光客や町民の皆さんに、無料で「川根どろどろゆず」を試飲してもらいました。

四季の里では町民の皆さんの来店が多く、もりのいずみでは観光客の来場が多かった印象を受けましたね。

——客足はどうでしたか。

●水口 夏休みシーズンの前とあって、それほどお客さんは多くはありませんでした。それでも皆さん、どろどろゆずに興味を示してくれましたから効果はあったと思います。各店舗で冷やした状態で販売できれば、夏場の需要はかなり伸びるかもしれないという期待も持てました。試飲と同時に販売もしたんですが、中には「小瓶（250ミリットル）を30本買うから」というお客さんもいて驚きました。どろどろゆずの自然な風味を分かってくれたんですね。今回

予定なんですよ。」

「今の子どもたちは「川」と触れ合う機会が減り、その魅力や怖さを知るチャンスが少なくなつたと衛さんは嘆く。

「私は年に一回、中川根第一小に招かれ、子どもたちが大井川の話などをするんですが、昔の川は、子どもが遊べる淵があちこちにあつて、魚も昆虫もたくさんいたんだ」と話すと、みんな興味津々なんです。ある男の子が「僕も一日でいいから、そんな川で遊んでみたい」と言っていたのが今でも忘れられません。

「そういう子どもたちに、少しでも川の魅力や自然の大切さを、もちろん怖さも含めて伝えていきたい。この町に豊かな自然環境が残っているうちに、大いに親しんでほしいし、目を向けてほしい。川に生息する魚もそうだし、近年戻りつつあるホタルもそうです。どちらも、きれいな水辺環境がないと育つてはくれません。私たちが大切にしなければならぬことを、そういった生き物たちが教えてくれているんだと思います。ホタルの鑑賞を通して、そんな思いまで伝えていけたらうれしいですね。」

——最近、県内で「川根ゆず」の知名度が上がっているようですが。

●水口 そう言ってくくださる人も増えました。今回の店頭販売の前には、個人向けの販売もしていました。また大手が扱ってくれることで少しずつ知名度が上がっているのではないかと思います。ゆず組合では、ゆずを使った菓子の開発も進めています。ゆず、ドリンクと併せてPRしていきたいらと思っています。

実は、どろどろゆず（小瓶）は最初60ケースつくつたんですが、だいぶ在庫が少なくなつてきました。今後、増産も検討していきます。

震災後、観光客数が激減していると言われました。ゆず製品が定着し、誘客の一助にならねばと思っています。



川根ゆず組合
水口眞夫 組合長(久保尾)

心が癒されました
高田美咲さん(藤川)



家の近くにホタルが出たと聞いて立ち寄ってみました。小さい頃、別の地区でホタルを見た経験はありましたが、藤川では初めてですね。まさかこんなに飛んでいるとは…。驚くと共に感激しました。星空もきれいだし、ホタルの舞う姿もきれいだし、心が癒されました。来て良かったです。

希望を見たホタル一匹

その年の夏、区内のあるお宅から、衛さんあてに一本の電話が入った。

「ホタルがね、一匹庭に舞い込んできたんだよ！」

「もしかと思い、現地に駆けつけた衛さんを待っていたのは、あわい光を放ちながら舞う数匹のホタルだった。

「何とも言えず、うれしかったですね。ホタルは徐々に増え、一昨年は10匹くらい。昨年は数十匹は見られたでしょうか。今年も結構飛び始めた

ので、これはぜひ地域の人も見てほしいと思い、周囲の草刈りを始めました。ただホタルはデリケートな生き物ですから、水辺周辺はかなり気を使いました」と苦笑した。

6月21日の夜、現地を訪れると既に数人の訪問客がいた。男の子がホタルを見てはしゃいだ。一緒にいるお母さんもうれしそう。暗いため懐中電灯は必須だが、安全にさえ配慮できれば、地域の憩いの場になる可能性は充分にあると感じられた。

藤川には、近くにふじつこ広場という区民憩いの場があ

る。その周辺をウォーキングする人が最近かなり増えたと衛さんは言う。

「元の自然は極力傷めないように、歩道を整備したり、小川の棧橋を付けたりして、いずれば、ふじつこ広場からてんぐ邑まで、一本のコースとして歩けるよう整備したいですね。ホタルの季節になれば、歩く楽しみもさらに増えるんじゃないかと思えます。

最近、「次の世代につないでいきたい」という思いが強くなつたそうだ。

「自分たちの代だけで終わらせるのではなく、若い人たちにも興味を持ってほしいんです。『おれもやってみようかな』と、一人でも思ってくれる人がいたら、ぜひ声をかけてほしいですね。ホタルが戻ってきたことが一つのきっかけとなり、また張り合いが増してきた気がします。」



今の子どもたちは、
川の魅力も、怖さも知らない
この町の自然環境が残っているうちに
もっともっと川に親しみ、
自然のことを知ってほしい



中村衛(なむらまもる)…やまめの里・てんぐ邑の世話役の人物。地元藤川で理髪店を営むかわら、地域づくり活動にも積極的に励む。取材した当日はヤマメの水槽の掃除や周辺の草刈りに汗を流していた。

自然に親しんでほしい

自然が豊かな川根本町。それでもやはり、昔と比べると環境が変わってきているのを感じる」と語る衛さん。

「以前の大井川には、ウグイ、アユ、ドジョウ、ウナギなどの川魚が当たり前のようにはなりました。そのことを知っている子どもがどれくらいいるでしょうか。」

てんぐ邑の小川に生息するのはホタルだけではない。ドジョウ、カジカ、ウグイ、ハヤ、カワムツ、ウナギ、イモリ…。沼エビというエビの一種までいる。こんな小さな川に、これほど多様な生物が生息しているとは…。

「大井川で見られる魚のたぐいは、ほぼ全てここに生息していると思います。『大井川川まつり(20ページ参照)』に展示する魚も、ここで採取す